

教員養成における自校教育 ——生徒との関わり方を中心とした教育実習不安解消に向けて——

全学教育開発センター 元根 朋美

1 はじめに

戦後、教員の資質の多様化を目的に、教員養成を目的とする学部以外の学生でも「制度上等しく教員養成に携わることができる」とした「開放制の教員養成の原則」による制度で教員免許状の取得を目指す開放制教職課程を履修する学生は、それぞれが所属する学部学科が卒業に求める学修に加え、教員免許取得に必要な科目も履修しなくてはならない。教員免許取得には大きく4分野の科目(教職に関する専門科目、教科に関する専門科目、教科または教職に関する専門科目、教育職員免許法施行規則第66条の6に定められた科目)の単位修得に加え、中学校1種免許取得を目指すのであればさらに介護等体験を行わなければならない。これらのうち、教科に関する専門科目や66条の6に定められた科目は、それぞれが所属する学部学科の卒業所要単位に含まれる学修と重なる科目もあるが、教職に関する専門科目や教科または教職に関する科目(中学校免許の場合35単位、高等学校免許の場合29単位)は卒業所要単位外の学修となる。この履修単位数は、教員免許状取得を卒業要件に含む教員養成大学・学部の学生と比較すると、開放制教職課程履修学生には大きな負担であることがわかる。また、文部科学省教職員課調べによる養成機関別の教員免許状取得率¹⁾でも、教員養成大学・学部では卒業生に対する免許状取得者の割合が79.1%と多くの学生が教員免許状を取得しているが、一般大学・学部では11.5%と、かなり少ない。一般大学私立A大学の開放制教職課程の教員免許状の割合は免許発行学部卒業生の9.46%²⁾と全国平均をやや下回っている。この教員免許状取得者の割合からみると、開放制教職課程を履修する学生は共に教員免許状取得に向けて学ぶ学生数が少ないことから、大半の学生が教員免許状取得を目指す教員養成大学・学部の学生と比較すると日常の中で教職課程に関する学修内容の共有や、学修方法の悩み等の共有を同学年間で図りにくい環境にあることがわかる。同時に、上下の学年間でも様々な情報や感情の共有が図りにくい環境にもおかれている。そもそも開放制教職課程は、教員になることを目的にしている教育学部とは異なり、オプションとしての選択肢であることも関係していよう。

実際に、開放制教職課程履修学生と話をしていると、それぞれが所属する学部学科の開放制教職課程を履修している学生数が少ないことから情報共有ができず、教員免許状取得に関する学修内容の悩みや、学修方法の悩み、卒業後の進路の悩みなどを個別に抱えていることを実感する。これらの悩みの解決策を見いだせないまま、職課程科目の履修、特に教育実習に対して漠然と不安や悩みを抱えながら学修を継続させている開放制教職課程履修学生の多さも感じる。そこで本研究では、開放制教職課程履修学生の教育実習不安解消の改善に資する基礎的資料を得ることを目的に、私立大学開放制教職課程を履修する学生の状況を把握することと、教育実習時の生徒

との関わり方に対する不安の解消につながるよう、学生自身が所属している教員免許発行大学が目指す教師像を知ること、不安の解消につなげることが可能か自校教育の効果を検討した。

2 本研究の調査概要

調査対象者は、私立A大学の開放制教職課程を履修している2015年度前期に開講された2年生以上向けの教職科目「特別活動論」の受講生4学科2～4年生59名。調査時期は2015年7月に行った。調査方法は、質問紙によるアンケート調査を実施。質問紙は授業中に配布、回収した。調査は三部形式で行った。最初に、教育実習に対する不安や関わり方の認識を問い、続いて学生に対しクイズ形式を用いた自校教育を行い、最後に自校教育を受講した感想をたずねた。調査項目は次の3種類である。

- ① 先行研究に基づいた教育実習に対する不安および属性：戸田(2014)、大野木(1995)らの学生の教育実習不安に関する先行研究を基に、授業実践力に関する質問(11問)、人間関係に関する質問(7問)、体調管理に関する質問(5問)、身だしなみに関する質問(6問)に加え、「実習全体に対して漠然と不安」と感じているかの質問
- ② 教師としての関わり方についての認識(モデルの有無、生徒に対する関わり方など)
- ③ 自校教育を受けた効果(自校の教育理念、歴史、位置づけ、目指す教師像を知ることによる教育実習に関する不安の軽減、学習指導要領の理解深化など)

3 結果と考察

私立大学開放制教職課程を履修する学生に対し、最初に教育実習に対してどのような不安を感じているかの状況を把握し、次に、生徒に対する関わり方のモデルがいることと学生自身が所属している教員免許発行大学が目指す教師像を知るための自校教育が教育実習の不安の解消に効果があるかどうかを以下の諸点から分析した。

3.1 私立大学開放制教職課程を履修する学生が抱えている教育実習不安の状況把握

私立大学開放制教職課程を履修する学生が教育実習に対してどのような不安を感じているかの状況を把握するために、教育実習に既に参加しているか否かの有無をたずね、教育実習未参加の学生を抽出し、以下の諸点から分析した。

3.1.1 単純集計結果

対象者の属性に関する単純集計結果を以下に列挙する。

- ① 教育実習への参加有無：参加済学生8名(13.6%)、未参加学生45名(76.3%)、未回答学生6名(10.2%)。この結果、本調査の対象学生となる教育実習未参加の学生数は45名となった。
- ② 対象学生(教育実習未参加学生)の学年別割合：4年生(6.8%)、3年生(40.9%)、2年生(52.3%)

- ③ 教育実習未参加学生の教員志望時期別割合(3分類): 卒業後すぐに教員になりたい(15.6%)、将来的に教員になりたい(53.3%)、免許取得のみ(31.1%)

3.1.2 教育実習に対する漠然とした不安感

教育実習未参加学生が、教育実習に対し漠然と不安に感じているかを図1に示した。

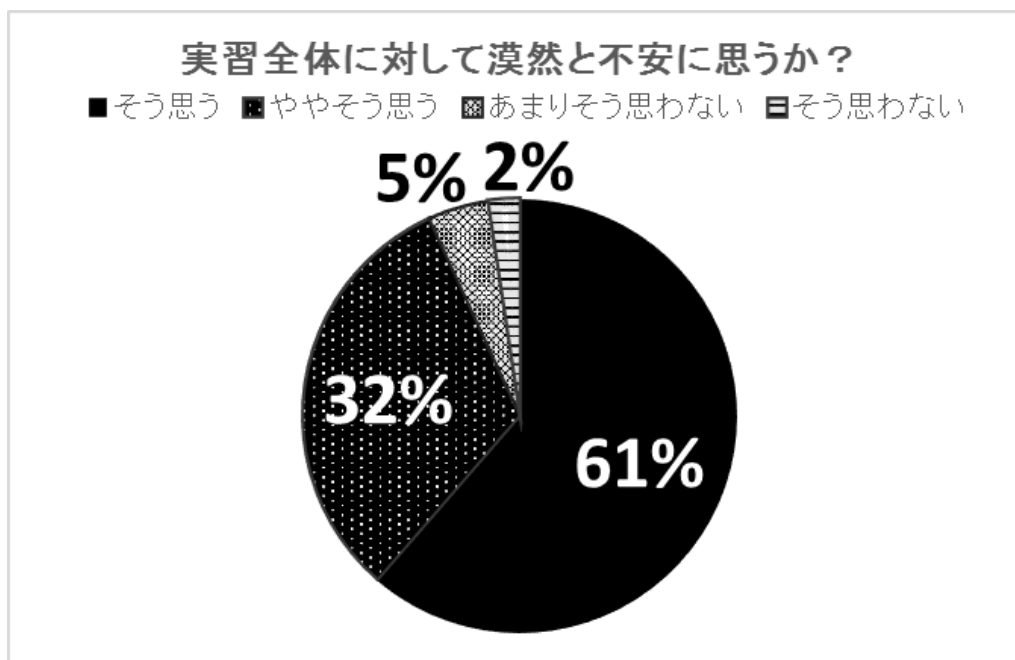


図 1 教育実習に対する不安感

図1に示すように、「そう思う」、「ややそう思う」と解答した学生の割合を合計すると、教育実習未経験の学生の93.2%が教育実習に対して漠然と不安を感じている傾向がみられた。

3.1.3 教育実習に対する不安要因の分析

2の①で述べた不安要因となる29項目について、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の順に4, 3, 2, 1点と得点化した。最初に「実習全体に対して漠然と不安」と感じている要因を明らかにするために29項目とのクロス集計を行い、次に重回帰分析を行った。以下の計算には、SPSSを用いた。

3.1.3.1 教育実習に対する漠然とした不安感と不安要因項目によるクロス集計

教育実習に対する漠然とした不安感の程度を不安要因となる29項目別にクロス集計し、 χ^2 検定を行った。その結果を表1に示した。

有意差があったのは授業実践力の項目4問と人間関係の項目6問、体力の項目1問のみであった。授業実践力に関する項目は11問中4問(36.36%)に有意差があった。授業実践力は学業とも強く関係する。私立A大学で開放制教職課程を設置している学科の入学時学力偏差値³⁾の平均は45.1と平均の50を下回っており、学生からも中学校、高等学校時代の自分自身の学力に対す

る自信の無さを聞くことから、授業スキルの項目に不安を感じているのではないかと考える。

人間関係に関する項目は7問中6問(76.71%)に有意差があり、他の要因と比較しても突出して不安との関係が高い。実習前の学生に話を聞くと、友人をはじめとする同世代の人々との関わりはあるが、実習対象者となる小中高生との関わりが薄いことや、スクールサポーターや塾講師として子ども達と関わっていても担当している学年と異なる学年の担当になれば、何に興味を持っているのか、休み時間等にどのような会話や遊びをしているのかが未知であること、今までは児童、生徒、学生という教えられる側の立場であったのに対し、初めて教える側の立場に立つことへの不安の声もあった。

体力に関する項目は5問中1問(20.0%)の睡眠時間の確保の質問に対してのみ有意差があった。これは、実習中は漠然と忙しいだろう、大変らしいという先入観から不安を感じているのではないかと考える。最後に、身だしなみに関する項目は、すべての質問で有意差がなかった。このことから、教育実習の不安感に身だしなみは関係が薄いことがわかる。

表1 教育実習に対する不安と不安要因項目によるクロス集計結果

	χ^2	df	漸近有意確率 (両側)	有意差が見られた質問項目の要因別割合	
授業実践力11問	教え方が未熟で、授業を聴いてもらえるか不安だ	19.956	6	.003 **	
	うまく授業をすることができず取り乱しそうで不安だ	12.900	9	.167	
	手際よく指導ができないのではと不安だ	12.710	6	.048 *	
	生徒にわかり易い授業ができるかどうか不安だ	1.888	3	.596	
	生徒の雑談が多くなり収集がつかなくなりそうで不安だ	3.876	9	.919	
	授業中に予想外の質問が出たら立ち往生してしまうか不安だ	8.638	9	.471	36.36%
	生徒たちが自分の授業を正確に理解してくれるか不安だ	12.937	6	.044 *	
	授業の途中で失敗して、生徒にバカにされないか不安だ	9.329	9	.407	
	授業の途中で失敗して、指導教諭に叱責されないか不安だ	12.721	6	.048 *	
	指導案づくりに関して不安だ	6.026	6	.420	
	指導案通りに授業ができるか不安だ	8.215	6	.223	
人間関係7問	生徒にいじめられるのではないかと不安だ	23.315	9	.006 **	
	今までと違う環境なので適応できるか不安だ	26.961	9	.001 ***	
	生徒たちとうまく人間関係を築けるか不安だ	30.324	9	.000 ***	
	人前で話すこと自体が不安だ	17.240	9	.045 *	75.71%
	教育実習生なので生徒がなめてかかってこないか心配だ	21.769	9	.010 **	
	実習校の教職員とうまく人間関係を築けるか不安だ	17.422	9	.043 *	
	実習校の指導教諭と意見が食い違わないか不安だ	13.595	9	.137	
体力5問	遅くまで残ることになり体力がもつか不安だ	7.123	9	.624	
	連日深夜まで実習準備をするのに体力がもつか不安だ	10.341	9	.324	
	実習中に体調が悪くなるのではないかと不安だ	8.362	9	.498	20.00%
	プライベートな時間が減り逃げたしたくなるのではと不安だ	7.121	9	.625	
	睡眠時間が確保できるか不安だ	22.502	9	.007 **	
身だしなみ6問	服装、髪型はどのような感じがよいのか不安だ	15.903	9	.069	
	おしゃれ、アケサリ、化粧などがどの程度許されるか不安だ	9.342	9	.406	
	着慣れないネクタイ、ブラウス等で疲れないか不安だ	10.547	9	.308	
	Yシャツやブラウス、洋服等の枚数が足りるか不安だ	9.744	9	.372	0%
	服装を「教育の場に適さない」と指摘されないか不安だ	11.755	9	.227	
	どのような服装をしていけばよいか不安だ	11.451	9	.246	

**p<.001, *p<.01, *p<.05

3.1.3.2 教育実習に対する不安に寄与する因子

教育実習に対する漠然とした不安に寄与する因子を明らかにするために、まず、教育実習未参加の学生 45 名の有効回答を得点化し、実習不安についてたずねた29項目間の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .929$ であり、十分な内部一貫性を有していることが確認できた。次に、実習に対する漠然とした不安感を従属変数、クロス集計の結果有意であった 11 項目を独立変数とする重回帰分析(強制法)を行った。重回帰分析の結果、重決定係数は.589 であり、1%水準で有意な値であった。これらの因子によって分散の 44.3%が説明された。それぞれの独立変数から従属変数への標準偏回帰係数を表2に示した。

表2 重回帰分析結果

	偏回帰係数	標準誤差	標準化係数 (β)	p
生徒たちとうまく人間関係を築けるか不安だ	0.493	0.164	0.612	**
教育実習生なので生徒がなめてかかってこないか心配だ	0.289	0.142	0.382	*
授業の途中で失敗して、指導教諭に叱責されないか不安だ	0.279	0.128	0.342	*
実習校の教職員とうまく人間関係を築けるか不安だ	-0.357	0.145	-0.490	*
生徒にいじめられるのではないかと不安だ	-0.519	0.166	-0.559	**
人前で話すこと自体が不安だ	0.170	0.111	0.249	
教え方が未熟で、授業を聴いてもらえるか不安だ	0.142	0.225	0.097	
今までと違う環境なので適応できるか不安だ	0.026	0.137	0.035	
睡眠時間が確保できるか不安だ	0.220	0.109	0.290	
手際よく指導ができないのではと不安だ	-0.017	0.212	-0.013	
生徒たちが自分の授業を正確に理解してくれるか不安だ	-0.376	0.189	-0.313	

従属変数: 実習不安 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

表2に示されるように、生徒がなめてかかってこないか、授業の途中で失敗して指導教諭に叱責されないか、実習校の教職員とうまく人間関係を築けるかから実習への不安感への標準偏回帰係数は5%の有意傾向にあり、生徒たちとうまく人間関係を築けるか、生徒にいじめられるのではないかは1%水準で有意な係数であった。それらのうち実習校の教職員とうまく人間関係を築けるかと生徒にいじめられるのではないかはマイナス符号がついていることから、実習への不安感に寄与しない傾向にあるといえよう。ここから、学生たちは、実習校の教職員との人間関係構築には不安を感じていないが、叱責されることに対しては不安を感じ、生徒からいじめられる不安は感じていないが、なめてかかってこないか、うまく人間関係を構築できるかに対しては不安を感じていることが示唆される。なかでも、生徒たちとうまく人間関係を築けるかどうかは実習への不安感に寄与する因子として重要な要因となっているといえよう。

3.2 教育実習に対する漠然とした不安解消に向けて: 仮説1 モデルの存在有無

教育実習に対する漠然とした不安は、生徒たちとうまく人間関係を築けるか、言い換えると生徒たちに対する関わり方が重要な要因となっていることがクロス集計および重回帰分析の結果わかった。そこで、学生にとってモデルとなる教員の存在があれば、これらの不安が解消されるかどうかを明らかにするために、モデルとなる教員の存在有無を不安要因となる29項目別にクロス集計

し、 χ^2 検定を行い、有意差があった項目を表3に示した。

表3 モデルの存在有無と有意差を認めた不安要因項目とのクロス集計

Q31 モデル有無×先行研究項目 クロス集計表		χ^2	df	漸近有意確率 (両側)	p
授 業 実 践	生徒たちが自分の授業を正確に理解してくれるか不安だ	7.045	2	.030	*
	授業中に予想外の質問が出たら立ち往生してしまうか不安だ	7.214	3	.065	†
人 間 関 係	Yシャツやブラウス、洋服等の枚数が足りるか不安だ	10.167	3	.017	*
	どのような服装をしていけばよいか不安だ	8.289	3	.040	*
	服装を「教育の場に適さない」と指摘されないか不安だ	7.587	3	.055	†
	おしゃれ、アクセサリ、化粧品などがどの程度許されるか不安だ	6.665	3	.083	†
	服装、髪型はどのような感じがよいか不安だ	6.622	3	.085	†

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

表3に示されるように、生徒たちとの人間関係構築に関する項目に有意差はみられなかったことから、モデルとなる教員の存在は生徒に対する関わり方の不安解消に関係が薄いことがわかる。一方で、モデルとなる教員の存在は身だしなみに対する不安の解消につながっているといえよう。

3.3 教育実習に対する漠然とした不安解消に向けて:仮説2 自校教育の効果

学生自身が所属している、教員免許発行大学が目指す教師像を知るための自校教育が教育実習の不安解消に効果があるかどうかを以下の諸点から分析した。

3.3.1 自校教育受講による変化:度数分布結果

教育実習未参加学生が、学生自身が所属する大学の教育理念を知るための自校教育を受講後、関わり方の不安や関わり方のイメージなどに対してどのように変化したかを表4に示した。

表4 自校教育を受講したことによる変化の度数分布

	自校教育を受講したことで				自公教育受講前よりも、 教師像がイメージし易くなった
	関わり方の不安が軽減された	A 大学生らしい関わり方をイメージすることができた	A 大学生らしい関わり方に自信がついた	学習指導要領の生徒に対する関わり方の理解がより深まった	
そう思う	5(12.2%)	7(17.5%)	6(13.3%)	6(14.6%)	8(19.5%)
ややそう思う	27(65.9%)	27(67.5%)	24(58.5%)	26(63.4%)	29(70.7%)
あまりそう思わない	9(22.0%)	6(13.3%)	11(26.8%)	9(22.0%)	4(9.8%)
そう思わない	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)

表4に示されるように、学生自身が所属する大学の教育理念を知るための自校教育を受講することによって、関わり方の不安が軽減されたと感じた学生は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせた78.1%と、多くの学生が肯定的に捉えていることがわかる。また、関わり方をイメージすることができたでは85.0%、関わり方の自信獲得では73.1%の学生が肯定的に捉えている。さらに、自校教育受講前と比較して教師像がイメージし易くなったかをたずねた項目でも90.2%の学生が肯定的に捉えていることから、教育実習未参加学生の関わり方が起因する教育実習不安は、自校教育を行うことで軽減されることが期待できる。さらに、自校教育を受講することにより、学習指導要領の理解

の深化にも繋がっていると肯定的に捉えている学生が78.0%いることから、自校教育は学習指導要領の理解に加え、教育実習の関わり方に対する不安解消にも一定の効果があることが期待できる。

3.3.2 教育実習に対する漠然とした不安感と自校教育受講後の変化によるクロス集計

教育実習に対する漠然とした不安感と自校教育受講後の変化をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果を表5および6に示した。

表5 「実習に漠然と不安」と自校教育受講後の関わり方不安軽減のクロス集計

		自校教育を受講したことで関わり方の不安が軽減された			
		そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
実習に 漠然と 不安	そう思わない	0	0	1 (3.7%)	0
	あまりそう思わない	0	0	2 (7.4%)	0
	ややそう思う	0	3 (33.3%)	9 (33.3%)	1 (20.0%)
	そう思う	0	6 (66.7%)	15 (55.6%)	4 (80.0%)

($\chi^2=2.276$, $df=6$, $p<1.0$)

表5に示されるように、有意差はみられなかった。しかし、漠然と不安を感じるほど関わり方の不安が軽減される度合いが高い可能性が示唆される結果であった。同時に、教育実習に不安を感じていなくても、関わり方の不安が軽減されたと感じていることから、自校教育は教育実習不安の有無に関係なく、関わり方の不安軽減に一定の効果があることが期待できる。

表6 「実習に漠然と不安」と自校教育受講後の教師像イメージし易さのクロス集計

		自校教育を受講前よりも、教師像がイメージし易くなった			
		そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
実習に 漠然と 不安	そう思わない	0	0	0	1 (12.5%)
	あまりそう思わない	0	0	2 (6.9%)	0
	ややそう思う	0	3 (75.0%)	10 (34.5%)	0
	そう思う	0	1 (25.0%)	17 (58.6%)	7 (87.5%)

($\chi^2=11.723$, $df=6$, $p<.10$)

表6に示されるように、差は統計学的に有意には達しなかったものの、漠然と不安を感じていなくても、自校教育受講後に多くの学生が教師像をイメージし易いと肯定的に捉えている傾向が認められた。一方で不安を感じている学生のうち4名が自校教育を受講しても不安が解消されていないと感じている。この結果から、自校教育で扱う教師像の内容には改善の余地があるといえよう。

3.3.3 生徒との人間関係不安と自校教育受講後の変化によるクロス集計

生徒たちとの人間関係高知に対する不安と自校教育受講後の変化をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果を表7および8に示した。

表7 生徒との人間関係構築不安と自校教育受講後の不安軽減のクロス集計

		自校教育を受講したことで関わり方の不安が軽減された			
		そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
人間関係構築不安	そう思わない	0	2 (22.2%)	1 (3.7%)	0
	あまりそう思わない	0	1 (11.1%)	2 (7.4%)	1 (20.0%)
	ややそう思う	0	3 (33.3%)	14 (51.9%)	2 (40.0%)
	そう思う	0	3 (33.3%)	10 (37.0%)	2 (40.0%)

($\chi^2=4.880$, $df=6$, $p<1.0$)

表7に示されるように、有意差はみられなかった。しかし生徒との人間関係構築に対する不安の有無に関わらず32名(78.0%)が自校教育受講後に関わり方の不安が軽減されたと肯定的に感じていることから、一定の効果があることが期待される。

表8 生徒との人間関係構築不安と自校教育後の教師像イメージし易さのクロス集計

		自校教育を受講前よりも、教師像がイメージし易くなった			
		そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
人間関係構築不安	そう思わない	0	0	1 (3.4%)	2 (25.0%)
	あまりそう思わない	0	1 (25.0%)	3 (10.3%)	0
	ややそう思う	0	0	16 (55.2%)	3 (37.5%)
	そう思う	0	3 (75.0%)	9 (31.0%)	3 (37.5%)

($\chi^2=10.384$, $df=6$, $p<1.0$)

表8に示されるように、有意差はみられなかった。しかし生徒との人間関係構築に対する不安の有無に関わらず、37名(90.2%)が自校教育受講後に生徒との関わり方につながる教師像のイメージが容易になったと感じていることから、自校教育は教師像のイメージづくりに一定の効果があることが期待される。

4 まとめ

本研究は、開放制教職課程履修学生の教育実習不安解消の改善に資する基礎的資料を得ることを目的に、私立大学開放制教職課程を履修する学生の状況を把握することと、教育実習時の生徒との関わり方に対する不安の解消につながるよう、学生自身が所属している教員免許発行大学が目指す教師像を知ることで、不安の解消につなげることが可能か自校教育の効果を検討した。その結果、教育実習未経験の学生の93.2%が教育実習に対して漠然と不安を感じている傾向がみられた。

そこで何に対して不安を感じているかを明らかにするために、どのような不安を感じているかを先行研究の不安要因となる項目とのクロス集計をした結果、1%水準で有意差がみられた「生徒たちとうまく人間関係を築けるか不安だ」と「今までと違う環境なので適応できるか不安だ」をはじめとする人間関係の項目と不安との関係が、授業実践力や体力、身だしなみといった他の要因と比較して高いことが明らかになった。さらに、教育実習に対する漠然とした不安に寄与する因子を明らかにするために重回帰分析を行った結果、生徒たちとうまく人間関係を築けるかどうかを実習への不安感に寄与する因子として重要な要因となっていることが明らかになった。これらの結果から、私

立大学開放制教職課程を履修する学生が漠然と抱えている教育実習に対する不安は、生徒たちとうまく人間関係を築けるか、つまり、生徒たちに対する関わり方が大きなウェイトを占めているといえよう。

次に、生徒たちに対する関わり方の不安を解消するための方策を模索するために、生徒達に対する関わり方の不安はモデルとなる教員がいることで軽減されるかを検証した結果、モデルとなる教員の存在は生徒に対する関わり方の不安解消に関係が薄いことが明らかになった。しかしながら、モデルとなる教員の存在は身だしなみに対する不安の解消にはつながっていることが明らかになった。

最後に、学生自身が所属している教員免許状発行大学が目指す教師像を学ぶ自校教育が教育実習に対する不安の解消につなげることが可能かを次の3つの視点から検証した。まず、自校教育は学習指導要領の理解に加え、教育実習の関わり方に対する不安解消に一定の効果があることが示唆された。次に、教育実習に対する漠然とした不安感に対する自校教育の効果は、関わり方の不安軽減に対し、教育実習不安の有無に関係なく、関わり方の不安軽減や教師像のイメージのし易さに一定の効果があることが示唆された。しかしながら、教育実習に対して漠然と不安を抱えている学生の一部は自校教育を受講した後も不安が解消されていなかったことから、自校教育で扱う教師像の内容には改善の余地があることも明らかになった。三つ目に、生徒との人間関係構築の不安に対する自校教育の効果は、生徒との人間関係構築の不安感の有無に関係なく、関わり方の不安軽減や教師像のイメージのし易さに一定の効果があることが示唆された。

以上の結果から、多くの学生が感じる教育実習に対する漠然とした不安を解消するために、自校の教育理念、歴史、位置づけ、目指す教師像を扱う自校教育を学ぶことは、一定の効果があると期待できる。しかしながら、一部の学生にはまだ解消できない不安が残っていることが観察できたので、自校教育で扱う内容を豊富化し、さらなる不安感の解消につなげていきたい。

引用文献

大野木裕明「大学生の教育実習不安」日本性格心理学会大会発表論文集, 4, 1995, pp. 68-

69.

中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」2006年7月11

日.

戸田浩暢「学生の教育実習に対する不安感の考察」広島女学院大学人間生活学部紀要, 創刊号, 2014, pp. 47-57.

注

1) 文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教員養成部会 教員免許制度ワーキンググループ (第5回) 議事録・配付資料「7. 養成機関別の免許状取得者数及び教員就職者数」、平成17年5月12日。

2) 私立A大学 HP 教員免許状取得状況、免許状取得件数と学生数比較 (2015年度卒業生対象) ※教員養成学科を除く。

3) Benesse マナビジョン HP 大学情報より筆者作成

http://manabi.benesse.ne.jp/daigaku/school/3731/nyushi/#contents_2 (2016年9月14日)

参考

学科	入試方法	入試別偏差値	学科別偏差値
A	(ア)型	47	46.5
	(イ)型	48	
	(ウ)型	45	
	(エ)型	46	
B	(ア)型	44	42.0
	(イ)型	44	
	(ウ)型	39	
	(エ)型	41	
C	(ア)型	47	47.0
	(イ)型	48	
	(ウ)型	46	
	(エ)型	47	
D	(ア)型	44	44.8
	(イ)型	47	
	(ウ)型	44	
	(エ)型	44	